

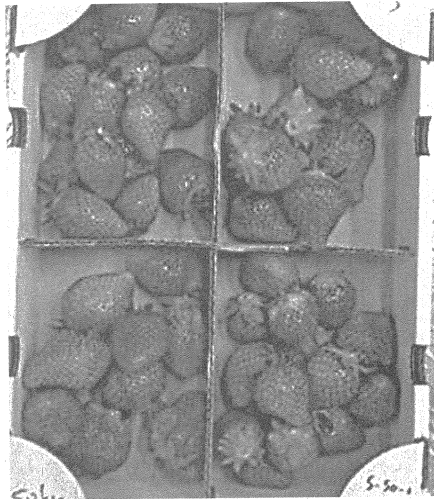
プラ包装環境負荷低い？

岩大発表 輸送中の損傷廃棄防ぐ

イチゴパックなどの石油資源由来のプラスチック包装は実は、環境への負荷が低いかもしれない。岩手大の研究チームがこんな成果を発表した。プラスチックで包装されなければ、トラックの輸送中に果物が傷ついて廃棄することにつながり、生産し直したり、再び輸送したりして、かえって環境負荷が高まるという。関連の研究論文計3本が2022年3月、国際誌に掲載された。(三品麻希子)



プラスチックのパックとフィルムで包装したイチゴ
(いずれも折笠教授提供)



箱に入れただけのイチゴ

チームは約7年前、プラスチックを使った包装が「環境に本当に悪いのか」をテーマに研究を始めた。イチゴを透明なプラスチックパックやフィルムで包装した場合と、単に厚紙で仕切っただけの段ボール容器に入れた場合とで、トラッ

ク輸送による環境負荷の違いを調べた。

その結果、トラックで2000キロを輸送すると、プラスチックで包装した場合の損傷率が8・99%だったのに対し、包装なしでは52・33%と高かった。チーム

はこうしたデータを踏まえ、イチゴの栽培からトラック輸送、廃棄までのトータルで考えると、包装したほうが化石燃料や鉱物資源などの削減率が47・3%になると推定。トラック輸送で果物が傷ついて廃棄されるのを防ぐことにつながり、余計な果物の栽培などに伴う環境負荷を抑えられる可能性がある」と結論づけた。

チームは今後、ほかの果物についての環境負荷や有機物を主原料とした「生分解性プラスチック」を使った包装についても調べる予定。同大農学部折笠貴寛

教授(農産食品プロセス工学)は「プラスチックにもプラスの面があることを認識し、最適な包装の仕方を考えていきたい」と話した。明治大理工学部の永井一清教授(高分子化学・包装学)の話「石油系プラスチック包装に対する印象が良くなるきっかけになる。包装された品物がお店まで運ばれる過程を広く知ってもらうことが大切だ」

※読売新聞 令和7年10月1日付 22面
※読売新聞社の許諾を得て掲載しています
※無断転載・複写を禁じます